

## 闇の中で山を感じるという奇跡をかじって

私は、高校から本格的に山に登り始めた。南アルプスや北アルプスの縦走、今年の夏には北海道にてトムラウシ山から大雪山への縦走、さらに利尻岳への単独山行など、何かと山には登ってきている。しかし、今回のアルプでの山行は、今までの自分の感じてきた山とはまったく違う山を体験させてくれるものであった。

まず、第一に視覚障害者の方と山に登るという体験である。今回の山行では、私のグループにはHさんという全盲の会員の方がいらっしやった。会のメンバーの方々は、皆「Hさんは、山の歩き方が本当にうまい。Hさんのサポートは、とてもいい体験になる。」と言っておられた。

私も実際にHさんのサポートをさせていただいた。麓のバス亭付近から始まる紅葉台までの登り道である。なるほど、Hさんは私のザックにつけられたサポート用のロープを握ってはいるが、あくまで握っているだけなのである。決してそのロープに引っ張られて進むというわけではないのだ。それは、地面のくぼみを歩くときも、階段を登るときでもある。自分の足の裏と、右手に握られたストックの感覚で山を歩いているのだ。おそらく、以前、Kさんも言うておられた「皮膚感覚」という視覚を失うことで目覚めた感覚をも駆使して、山に対してからだ全体で向き合っているという印象を受けた。これは、私自身がサポートされる側に立つことでより一層強く感じられることになる。

第二の人生初体験は、上記の「私自身がサポートされる側に立つ」ということである。目的地である足和田山に到着し、残すは下山のみとなったとき、私は、何かこの場所とこの時間でしか体験できないものはないかと考えた。導きだした答えは、自分も光を閉ざして、闇の中で山を感じるというものだった。会のメンバーの方にサポートをお願いし、眼鏡に黒い手袋を挟んで視界を塞いで山を下りた。なんという恐怖。なんという緊張。自分の前に何があるのか、サイドはどうなっているのか、どれくらいの距離を歩いたのか。情報がまったく頭に入ってこない。腰がひける、足が前に伸びない、からだ全体に必要以上に力が入ると同時に背中が汗ばみだす。階段で滑り、石に足を取られ、最後にはルートから足を踏み外し、完全にしりもちをついた。時間にすると約30分の体験であったが、とても長く感じられた。そこには確実にクロノス時間ではなく、カイロス時間、つまり物理法則によらない人間主観の時間が流れていたと思う。

そして、もう一つ。山をゆっくりと味わいながら登るというアルプの会のスタイルも私にとってはとても新鮮であった。今までの私の山の登り方というのは、典型的な、若さにまかせたゴリ押し型の登り方であったと思う。どうしてもマップタイムに刺激されて、スピードばかり追い求めていた(トレーニングを兼ねていたからでもあるが)。だが、ゆっくり歩き、草を見て立ち止まり、花を見て立ち止まり、小動物の気配に立ち止まるというのも、様々な発見があってももしろい。そのような登り方を今までもしてきたのだろう、会のメンバーは皆、草花や木について詳しい。山の楽しみ方は、山に入る人の数だけ存在す

と思う。今回、アルプ流の山の楽しみ方を味わうことができたのもとてもいい経験になると思う。

当然、初めての体験が多かったので、歩くことに必死で、外界の音や感触を味わう余裕は正直あまりなかった。しかし、この山行での新たな体験は、私にとって山というフィールドの新たな可能性を見出してくれたような気がする。会のメンバーは、障害のある人も、ない人も支えあいながら本当に楽しそうに山を登っていた。山は「人生」にたとえられることがよくあるが、その点でもウェルネスの見地から登山の持つ有用性が確認できるし、私の意識の中ではますます実証されていくのである。